

『 恵みと平安があるように 』

ローマ人への手紙 1章 1～7節

青木 信太郎 牧師

今朝から読み進めるローマ書はパウロの著作ですが、13あるパウロ書簡の中では少し違う性格を持っています。パウロ書簡の多くは、パウロ自身が伝道して産み出された教会へと宛てた手紙であり、パウロと深い関わりのあった個人への手紙です。しかしローマ書はパウロがまだ訪れる以前に、未だ見ぬローマにいるキリスト者の群れへと宛てた手紙なのです。そして、パウロ書簡の中でローマ書が最初の著作ではありませんが、パウロ書簡の最初に配置されていると言うことです。なぜでしょうか？それはローマ書では福音が体系的に組織的に記されているからです。福音の教理が詰まっている書物だからです。ユダヤ人キリスト者とローマ人キリスト者(異邦人キリスト者)が混在、むしろ異邦人キリスト者が半数以上であったローマの諸教会に「真の福音理解」をこの書簡にしたためたのです。パウロはローマに行くことを待望していましたが、訪れるその前に自らの人生を捧げて伝えている福音について十分に説明して、福音の共通理解に立っていただきたいと願っているのです。そのような意味でローマ書はすべての教会が親しむ必要がある書物です。

◆ 人生の確かな目的と意味

パウロは先ず1節で自己紹介から始めています。ここでは三つの事柄が強調されています。一つ目。パウロは神の福音のために【選び分けられ】たと自己紹介していることです。“選び分けられ”と訳される言葉は「神様によって特別に聖別された」という意味を持ちます。パウロは「神様が私をご計画のうちに選んで聖別してくださいました。」と自己紹介します。二つ目。パウロは神の福音のために【使徒として召された】と自己紹介しています。“使徒”と訳される言葉の意味は「遣わされた者」という意味です。「私は神様によって使命が与えられて遣わされた者です。」と自らを説明しました。三つ目。パウロは神の福音のために【キリスト・イエスのしもべ】であると自己紹介しています。“しもべ”と訳される言葉は元来「奴隷」という意味です。パウロは救い主イエス様への完全な服従を表明しているのです。私たちが神様に対して「主よ」と語りかける時、「私はしもべです」と表明することに他ならないのです。パウロは「神様が私を聖別してください、神様が私に使命を与えて遣わしてください、救い主イエス様に完全に従う者としてくださいました。」と自己紹介しました。そしてそれは「神の福音のため」であると告白しているのです。使徒の働きを長らく読み勧めて来た私たちは、大伝道者パウロならではの自己紹介と感ずるでしょう。私たちは自らをこのようには自己紹介できないとも思ってしまう。しかし注目したいことは、パウロは「神様が私を選び、神様が使命を与えて遣わし、イエス様に服従するものとしてくださいました」「神様が私を」と説明していることです。自分の人生に自分で意味を見出しているのではなく、私の人生に神様が目的と意味を与えてくださっているという自己紹介なのです。

◆ 本題は良き知らせ

この挨拶文の特徴は2節から6節まで説明がつけられていることです。「私は神によって聖別され、神によって使命が与えられ、救い主イエス様のしもべである」というパウロの自己紹介の強調点は【神の福音のために】という目的であります。“福音”と訳される言葉は皆さんご存知の通り直訳すると“良い知らせ”です。そこでパウロは2節から6節まで「神の福音」すなわち「神様からの良い知らせ」について説明しています。【2-3節前半】パウロは「神の福音＝良い知らせ」とは「御子に関すること」と明確にし、そしてそれは

「神様が預言者たちを通して旧約聖書で約束してくださっていたこと」であるとも説明しています。では“御子に関すること”とは何か？【3-4節】“神の御子”は【肉によればダビデの子孫として生まれ】たとパウロは説明します。【肉によれば】とは神の御子が私たちと同じ人としてこの世に生まれてくださったことを指しています。そして預言者が旧約聖書において預言した通りに、ダビデ王の家系に人として生まれてくださったと語ります。パウロは続けます。“神の御子”は【聖い御霊によれば、死者の中から復活された】と説明しました。【聖い御霊によれば】とは御子の本来のご性質を明確にする表現です。御子は本来聖いお方であるにも関わらず、肉によって＝すなわち私たち罪人と同じ人として生まれてくださいました。しかし聖い霊を持つ御子は滅びに至ることなく死をも打ち破られて復活されたとパウロは説明しているのです。神の御子が聖書の預言どおりにダビデの家系に人として生まれ、十字架にかけられ、しかし聖いお方である御子は聖書の預言どおりに復活された。この御子の地上での生涯は“大能”すなわち神の偉大な力が公に現されたことに他ならない。とパウロは解説しているのです。

神の福音のために生きるパウロは自らが何者であるのか以上に、神の福音＝良き知らせが何であるのかを明確にする必要があったのです。主イエス・キリストの十字架と復活という良き知らせが本題であり、その良き知らせのために神様が私を選び、遣わし、しもべとしてくださったという自己紹介なのです。

◆ 使徒の務めという恵み

パウロは福音の説明をこのように閉じています。【5-6節】1節の自己紹介では神の福音＝主イエス・キリストの十字架と復活を宣べ伝えるために私は神に選ばれ、遣わされ、キリストのしもべとなったと伝えているのですが、5節では【私たちは恵みと使徒の務めを受けました】6節では【あなたがたも～召された人々です】と語るのです。「恵みと使徒の務め」とは“恵み”“使徒の務め”という二つで分離して考えるべきではなく、非常に密接な一つの言葉として理解するべきです。つまり「使徒の務めという恵み」ということです。パウロは「私のみならず私たちが使徒の務めという恵みを受けている」と伝えているのです。何のために？1節でパウロは【神の福音のために】と自己紹介していましたが、5節では【御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです】と詳しく解説しています。信仰とは主なる神様への服従に他なりません。あらゆる国の人々に主に従う信仰をもたらすために私たちは召されていると説明しています。そして【6節】あなたがたも主イエス・キリストのしもべとして召されていると説明を閉じています。パウロはローマの諸教会に属するキリスト者たちに「私たちは」「あなたがたも」とパウロもローマのキリスト者も同様に福音のために召されていることを強調したのです。そしてこの書簡は時代を超えてすべての教会が親しむべき書簡である事を覚えるとき、私たちもまた主イエス・キリストの福音のために使徒の務めという恵みが与えられていることを胸に刻みたいのです。

◆ まとめ

差出人パウロの自己紹介と宛先ローマ教会が神の福音に召されていることが語られた上で最後の挨拶です。【7節】“恵みと平安”ギリシヤ人は「恵みがあるように」と挨拶し、ユダヤ人は「平安があるように（シャロム）」と挨拶します。“恵み”とは受けるに値しない者が預かることが出来る愛のことです。“平安”とはその恵みよってもたらされる幸いな状態のことです。その「恵みと平安」は父なる神様と主イエス・キリストによって与えられるものです。これからパウロが手紙の中で展開する真の福音理解こそ「恵みと平安」へと繋がってゆくのです。そしてパウロのこの挨拶は今、私たちの教会に送られた挨拶でもあります。ローマ書で確かにされている福音理解＝主イエス・キリストの十字架と復活の確かな理解について確認して参りましょう。そして主から与えられている「恵みと平安」を味わって行くことが出来れば幸いです。